

アフガニスタン山の学校だより ばあーる増刊 2015年号

通算31号

第12回公式訪問報告



整備された図書室で本を読む2年生



放課後、回バで荷運びをするサラム君



成績優秀者への表彰



落書きもなく使い込まれた机



算数の時間、豆を使って計算をする



2015年も年の瀬が迫って参りましたが、みなさまにとつて、この1年はどのような年だったでしょうか。会の方は春の公式訪問、そして、秋の報告会を無事に終えることができました。報告会の第二部では在日アフガン人のアーセフィさん、セデカさんのお二人をお招きしてアフガニスタンについて語ってもらいました。

その報告会が終わってまもなくアフガニスタン北部の都市クンドウズをタリバーンが占拠、政府軍との間で戦闘が始まりました。その報に接した会員のみなさまもアフガニスタンの現状を案じておられると思います。しかし、どんなに戦闘が続いても、人々の思いは一つ、それは「平和になること」です。アーセフィさんとセデカさんが現地の人々の気持ちを代弁するかの様に平和への思いを語った姿が忘れられません。

ISの勢力拡大、なお収まらない治安状況……、そうした状況の中では、アフガニスタンに平和がすぐにやってくるのは難しいかもしれません。でも、きつといつの日か、若い世代が本物の平和をつくり上げる日が来るに違いありません。もちろん、それには世界の国々、人々の力添えが必要です。「自分たちの子どもを戦場に送らない」というだけでなく、「世界から戦いをなくす」とことで、私たちは「本当の平和」が手にできるはずです。そのためにささやかであっても、活動を続けていきます。

挨拶原稿を書き上げた後に、アフガニスタン北部大地震が起きました。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

長倉洋海

第12回

アフガニスタン公式訪問

今年の訪問団の滞在は、5月5日から5月13日まで。長倉代表のレポートです。



5月5日(火)

日本を出発。イスタンブール経由で6日カブールに到着。今年は私一人の訪問。空港の外で安井さんと運転手のサーレと合流。カブールで図書などの買い物を買ませ、8日、パンシールに向かう。

途上、トラックに乗って結婚式に向かう子どもたちを見る。荷台で子どもたちは手拍子で楽しそうに歌っている。カブールではまわりの山の上まで家がびつしり、どんどん人口が増えているのがわかる。商店にはスイカ、みかん、リンゴ、バナナなどが山盛りだ。



果物売店と運搬手のアフバル

峡谷の入り口、ドロサンガでは、殉教者たちの写真がコンクリート壁の上に20枚ほど掲げられていた。中に友人だったダウド(当時内務副大臣)やパナ、アヤトラハーンの顔を見つけた。彼らの死を無駄なものにしないためにも平和が訪れてほしい。マスー

ドの廟があるサリチャの丘から立派なサッカー場が見えた。5年かかったが、やっと完成したのだ。

学校は休日なのでサフダル一家の建築中の家を見にいく。すっかりした作りで平屋、部屋は二部屋だ。内装はまだだし、屋根もかかっていないが、いい家になりそう。セメント、窓ガラス、床の材料など買い足すものは残っているが、日本で集まった寄付金で賄えそうなので安心した。仮住まいに戻ってみんなと話す。高校1年生の次男のバーゼットは建築家になりたいという。次女のシャボナはジャーナリスト志望、長女のファトナは美術学校に進学するのが夢だと話す。いつになくみんなの表情が明るくなっていた。亡きサフダルも喜んでいるだろう。



新しい家とサフダルの家族



完成したサッカー場

中学2年生のカティーブが迎えにきて一緒に宿泊先のガーウィンに向かう。途中のタリブーンでは、リンゴや大きな木が倒れていた。先月、パンシールの

上流部で大規模な雪崩があつてたくさんの方が亡くなった。しかし、ポーランドでは犠牲者がなかったのは不幸中の幸いだ。それでも、子どもたちは「ドローンと大きな音がした。とても怖かった。それが6回もあつたんだ」と話す。

ガーウィンへの道は巨大な石が落ちて道を塞いでいた。せつかく道路を広げても、この落石をなんとかしないと。途中で、着飾ったアスラム一家と出会う。カブールの結婚式に泊まりがけで行くところだという。がっかりする私に、「ソミーヤが『ヒロミが来るから行かない』と村で待っている」と聞いて、ウルツとする。家畜の世話があるアミンとマジヤミンも残っているという。

雪崩で木々がなぎ倒されたタリブーン



5月9日(土)

学校ではうれしいニュースが。山の学校を卒業して高校に進学した12名が大学に受かったという。パンシール、バグラムやカピサ、遠くはヘラートやヘルマンドの大学に受かった者もいる。うち9名が進学するといいい、そのなかには昨年、進学をあきらめたシャーズィアも入っていた。

また昨年、糖尿病になつて長期欠席していたバシールにも会った。前はやせ細っていたのに少しふつくらとしている。「元氣になったなあ」というとモジモジしながら笑顔を見せる。いまでも月1回、カブールの児童

病院に通っていて、日3回、自分で注射を打つといい、腕は注射のあとでいっぱいだった。でも、落第せず進学もできて、本当に良かった。



復学したバシーラ

昼から安井さんが積み残した文房具などの荷物を運んで来てくれた。日帰りだったので、さっそく先生たちと話し合いを持つ。現在、生徒数は小・中学で136名。新任の先生は二人。一人は昨年亡くなったカリマ先生の後任で1年の担任となったサミナ先生。もう一人はダリとパシトゥ語を教えるアイシャ先生だ。「ガニ大統領になって何か変わったか」と聞くと「給料が10アフガニー(20円)上がって、教員数が減らされた」と答えるので苦笑い。

黒板に書く

生徒たちに日本から持参した三色ボールペンと替芯、ノート各5冊、1年生にはカバン、低学年の成績優秀者には色鉛筆、高学年には英語辞典、保温水筒などを贈る。そして、交流会。目玉はカプールで購入したデンマーク製のビスケットセット。大きな缶の入れ物に入って、なんと75アフガニーだ。少しだけ食べて、あとは家族に持って帰る子が多かった。



5月10日(日)

私は各教室で授業の様子を見、写真に撮る。子どもたちが算数の計算に木の実を使って足し算や引き算をしているのが微笑ましかった。コンクリート製の黒板の傷みがひどいのが気にかかる。いくら消してもチョークが残ってしまう。校長はホワイトボードを買いたいという。マーカーの代金がばかにならないと思っただけ、あとで安く入手できることがわかり、それを学校側で負担するというので、ボードの購入を決めた。これで子どもたちが暗い教室でも黒板の字を読みやすくなるだろう。



5月11日(月)

ホラム先生の家に昼食を招かれる。精一杯のもてなしに感謝する。高校生になったワッハブが遊びに来た。山の学校ではいつもトップの成績だったが、高校ではどうなのだろう。「13番だ」と聞いて意外だった。彼は往復に4時間もかかり、授業中に眠ってしまったことがあるという。ホラムの長男ナウイドも高校生になったが、マスード工業高校はバザラックからさらに上流のオストナにあり往復6時間かかる。毎日のように「バイクを買って」とせがんでいるらしい。そういうカテゴリーは「家の馬を売ってオートバイを買った」と話していた。



5月12日(火)

図書室の整備をする。前に新校舎の教室を図書室にするというので本棚の製作費を渡していたが、お粗末な感じが分かり。本も雑誌を棚に積み重ねている



職員室の本を図書室へ運ぶ

だけだ。「ネズミにかじられるので大切な本は職員室の鍵がかかるスチール製の本棚に入ったままで」と聞いて、スチールの本棚ごと、図書室に移動させることを提案。7年生と8年生が手伝ってくれて大移動が始まった。本を表紙が見えるように並べると見違えるようによくなった。図書担当のシユグファ先生も図書委員のムシユゴーンも、気合いが入ったのか、「さっそくやってきた1年生たちにてきばきと閲覧方法を指導にぎわう図書室を見てうれしくなった。



5月13日(水)

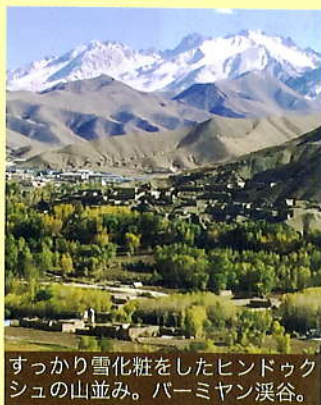
学校での滞在が最後の日。二人の父兄と女子高校生がやってきて、通学用にバスを仕立ててほしい」と頼んできたが断った。「13年前は戦争が終わったばかりで貧しかった。しかし、いま下の地域ではあちこちに3階、4階建ての豪邸が建っている。日本の支援者の方々は千円、二千元とつましい生活の中から支援を下さっている。その方々に求めるより、地域のお金持ちに支援を求めるのが道理だと思ふ。あなたがたが大人になったら、地域の格差をどうしたら縮めることができるか考えてほしい」と話した。

授業が終わってから、人気行事のスイカ割りを楽しむ。子どもたちに笑顔があふれ、にぎやかな声が峡谷にこだました。きつとマスードもこの歓声を聞いているに違いないと思いながら、ポーランドをあとにした。

ムルサルさんのカブール通信

アフガニスタン近況 安井浩美

今年も残すところあとわずか。11月に入り急に寒くなり、カブール周辺の山々にも積雪が見られついに本格的な冬の到来にちよびり先が思いやられる私です。カブールもさることながらパンジシル、ましてやポーランドはもうすっかり紅葉も終わり雪が降るのも時間の問題です。10月には、大きな地震がアフガニスタン東部、北部を襲い100名以上の死者を出しました。皆さまにもいろいろとご心配いただきましたが、カ



すっかり雪化粧をしたヒンドックシュの山並み。パーミヤン渓谷。

ブールもポーランドの人々も大きな被害はなく、若干家屋の損壊がありました。けが人などは出ていません。ただ、これから寒くなる時期に家屋の損壊は、家計の大きな出費です。国からの家屋の再建のための支援はありません。

2015年を振り返ってみると大変な騒動で成立した挙国一致政権。国民の期待をよそにまだにこれといった成果も出せず、10月には、北部クンドузがタリバンの手に落ちるといふ失態を政府軍はおかし、その後NATOの支援で再び政府軍に取り戻されました。こうした、タリバン政権崩壊後に初めて都市がタリバンの手に陥落してしまったという事態に、国民の治安に対する不安はつのるばかり。さらには、クンドузでは、無差別殺人、レイプ、銀行や商店の略奪などがおこり大きな社会問題にもなっています。南部、タリバン政権の首都だったカンダハルが落ち着きを取り戻したかと思えば、北部が不安定になり、さらには東部ではISISが勢力を拡げようと国軍や警察との間で戦闘

が絶えません。つい、先日にはザブール州でタリバンがISISかはっきりしないのですが、人質にとられていた7人が斬首され、うち2人は10



カブールで一番古い地区の西洋式建築が綺麗にカラフルに模様替え。ほとんど水のないカブール川にシャヒードシャムシェラモスクが映っています。

代の少年、1人は9歳の少女で、それもみなハザラ人(アフガニスタンの民族の一つ)だったことから、カブールではハザラ人を中心とした大きなデモが起こり、7人の棺が大統領府前に置かれ、政府への抗議行動が激しく行われました。さらには、この事件の少し前に中部、ゴール州で19歳の女性が姦通罪で石投げの刑で地元民らに殺害される事件も起こっています。書きながらまったく話がないなと肩を落とさずにははいられません。山の学校の支援も10年を過ぎ、本来ならばアフガニスタンは、平和に向かい独り立ちしてしてくれるものだと思っていたのに。ここにきて国内の治安状況は、悪くなるばかりです。本当に残念な話です。2016年は、外国部隊の完全撤退の予定でしたが、昨今の状況から米軍の撤退にストップがかかりそうです。イスラム世界は、いったいどこに向かうのでしょうか? こういった状況を招く原因の一つに、教育が挙げられると思います。やはり人々の教育レベルが低いため、的確に物事を判断、思考できないことは、今のアフガニスタンの嘆きでもあると思います。



カブールでの車両爆弾で破壊された家屋。亡くなった人の写真が壊れた家屋にかかっていた。

つくづく教育の大切さというのを身にしみて感じる私です。皆様のご支援心より感謝いたします。

事務局から

●9月27日(日)武蔵野芸能劇場にて第12回現地報告会を開催いたしました。長倉代表のスライド・トークとともに今回は在日アフガン人、江藤セデカさんとファルク・アーセフィさんをゲストに迎え「アフガニスタンを縦横に語る」というテーマで長倉代表との対談を行いました。参加者は50人弱でしたが大変興味深い内容で参加者からもいろいろの質問が出され盛り上がりしました。長倉代表の書籍「ボストカードや展示パネルの販売なども好評でした。」

●不要切手や書き損じはがきのご提供、たいへん感謝しております。今回の発送にも使わせていただきました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

●住所変更の場合はお手数ですが電話、ファックスはがき、メール等で事務局までご連絡をお願いいたします。

●会員が出版した本の紹介です。

『獄中メモは問う 作文教育が罪にされた時代』

佐竹直子著(北海道新聞社)定価1400円(税込)

2015年7月、教育への国家介入が強まる現代との相似性からも高く評価できる力作」と日本ジャーナリスト会議のJCI賞を受賞。佐竹直子さんは釧路在住で2004年の山の学校の会設立当初からの会員としていろいろな形で支援活動をしている新聞記者です。

・パレスチナ写真集『Bookra』高橋美香著

(株式会社ビーナイス)定価17280円(税込)

「Bookra」はアラビア語の方言で「明日」という意味。明日こそは、今日よりもいい日になりましように、また明日も元気で笑えますようにと、毎日を賢明に生きるパレスチナの人々との交流の記録。高橋美香さんは当会設立当初から運営委員として活躍している写真家です。

●アフガニスタン北部大地震への支援、および額入り写真購入の振込用紙も同封いたしました。併せてご確認いただければと思います。

〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
FAX&電話: 042-345-7805 E-mail: info.yamanogaki@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogaki
郵便振替口座: 00160-1-667404
編集: 天野みか 岩崎 繁 大守 裕 水間真紀
題字: 近藤理恵 デザイン: 浅井た志 印刷: 藤田印刷(株)

アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パンジシル渓谷ポーランド村の子どものための教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。※2017年3月まで延長することになりました。